

## リハビリと感謝

椅子に座り、足元のタオルを左足の指先でつかむ。榎田亮介のリハビリは、いつもこの単純作業から始まる。

今から約2年前の2007年10月7日、ドイツでプレーしていた榎田は、試合中に左ヒザを脱臼した。左足のヒザから下はあらゆる方向に折れ曲がり、ヒザのじん帯はほとんど断裂していた。

それまでの榎田は順調だった。ホンダ熊本を辞めて、無謀とも言われた海外挑戦の夢をかなえた。ドイツリーグ4部のピルナで1年目から活躍し、チームの3部昇格に貢献した。ピルナでの2年目のシーズンも、決勝ゴールを決めるなど、チームに欠かせない選手になっていた。そんな矢先の大ケガだった。

ドイツの医者からは「今後2本の足で歩けるかどうかもわからない。ハンドボール選手として復帰するのは諦めなさい」と言われた。実際、ハンドボールでは前例のないケガだったし、じん帯の再建手術は大がかりなものだった。しかし落ち込む榎田に、ピルナの仲間が声をかけた。

「現役復帰が無理というのでは医者が言うことであって、クシがハンドボールに戻りたいのであれば、戻ってきたらいいんじゃないか」

その言葉は、榎田にとって

# VOICE OF HANDBALL

vol.45

久保 弘毅  
text by Hiroki Kubo

## 送球の昂

～榎田亮介(元ドイツ・ピルナ)が星をつかむまで～

ハンドボールライターとして活躍する久保弘毅さんが毎月徹底取材を行なう本誌でも大人気の連載。ハンドボール界のさまざまな声を久保さん独特の切り口でお届けする。今月はHonda、ホンダ熊本を経て、ドイツ3部リーグで活躍し、大ケガを乗り越え、日本球界への復帰をめざす榎田亮介の素顔を追った。



日本球界への復帰をめざす榎田亮介(写真はホンダ熊本時代)

の心の支えとなった。日本に戻ってからのリハビリでは、母校の中部大でトレーナーを務める大西貴幸がメニューを作ってくれた。その中のひとつが、冒頭で紹介した、左足の指でタオルをつかむトレーニングだ。

リハビリを始めた当初、榎田はその動きさえ満足にできなかった。左足でタオルをつかむメニューだけを8時間続けたこともあった。集中力が途切れそうになったらサプリメントを飲んで、また同じ動きを延々と繰り返す。気の遠くなるような毎日だった。

今は左ヒザの状態も7割程度まで回復し、大西が付きっきりでリハビリを見ることもなくなった。大西からは「ハンドボールの動きの中で気になる痛みがあったら、言ってくれ」と言われている。榎田は、大西の大きなやり方を気に入っている。「大西さんは結構アバウトなんですよ」と口にしなが、内心では、大西のリハビリが正しいことを自分の体を通じて証明したいと思っている。

左ヒザを痛めてからの2年間は長かったが、大西やピルナでの同僚、執刀医をはじめ、多くの人たちに支えられた2年間でもあった。人の温かさに触れるうちに、榎田は「もはや自分ひとりの左ヒザではない」と思うようになった。昨今のスポーツ界では、実

体を伴わない「感謝」という言葉が横行している。榎田自身も、以前はそんな言葉が好きではなかった。だが、ケガを乗り越えつつある今となっては「ありがたい」と素直に思えるようになった。

「僕は高尚な人間でもないし、ドロドロした部分もあるひとりの男ですよ」と榎田は照れる。それでも自分の左ヒザを見るたびに、榎田の脳裏には、多くの人たちへの思いがよぎるのだった。

### 死ぬ気でコミュニケーションを取ってきた

母校の中部大でリハビリを続けるうちに、榎田はハンドボール部以外の学生とも知り合うようになった。とあるラグビー部員と話をするように、なりたいきさつを、榎田は説明してくれた。

「あの子はね、僕をラグビー部のOBだと勘違いしてあいきさつしてきたんですよ。それからいろいろと話をするようになって」

10才以上も年が離れた大学生とも、榎田は普通になじんでいる。「僕の精神年齢が低いから」と榎田は笑うが、そのコミュニケーション能力も、榎田の武器と言えるだろう。子供のころからガキ大将で、中学時代は野球部のエースで4番。典型的な「お山の大将」で育ったかに見えるが、榎田の雰囲気察する能力は

高い。32年の人生で20回以上引越すうちに、自然と空気を読むことを覚えたという。例えば多くの人たちと話す場合、榎田は会話の流れを読んで、自分に求められている役割を考える。笑いを求められているのであれば、時には自分の頭髪をネタにしても笑いを取る。聞き役に回った方がいいと判断すれば、静かに耳を傾ける。

ハンドボールでも同様だ。トライアウトを受けるチームを分析し、若手が多いチームであれば、リーダーシップをアピールする。小柄な選手が多いチームであれば、フィジカル面で自分を売り込む。元来のサービスピッチもあるが、とくにドイツに行つてからは、相手の求めるものを提供しようという意識が高まった。

「ピルナに行った最初の年に、攻撃では右サイド、守備では5:1DFのトップを求められました。右サイドも本職じゃないし、トップDFなんて日本でもやったことがないから、悩みましたよ。でも、ドイツでは自分は小さいから、そこで生きていくしかない。言葉も通じない国で、いかに自分の居場所を作るかを考えるうちに、自分に求められている役割を突き詰めるようになりました」

ヨーロッパはプロの世界だ。実力がなければ生きていけない。だからラストはまだ読んでいないんですけどね」

そんなオチもまた榎田らしいが、いつか榎田にもハンドボールの星をつかむ日がやって来るだろう。当面の目標は2年ぶりの現役復帰になる。

◇ この原稿を書いている8月9日現在、榎田の所属は決まっていない。現在は国内のチームと交渉を続けているとのこと。「個人でのスポンサーを集めて競技を続けたい」という榎田の意向もあり、細部の調整は残っているが、9月からの日本リーグで榎田がプレーする可能性は充分にある。

しかし、榎田の夢は現役復帰だけでは終わらない。「2016年の東京オリンピックで、39才の僕が日本代表になっていくんですよ。自分の子供ぐらいの離れた選手といっしょに、日の丸を背負って戦うのもおもしろいでしょう」

榎田亮介が綴る「送球の昂」、とてつもなく長い物語になりそうだ。



ハンズボールパークの講演で、吉田耕平(中)、石黒将之(左)らとともに海外の経験を語る

練習相手は誰でもいいというわけではない。1対1は、チームで一番強い相手と勝負する。中部大で練習する時は、チーム一のフィジカルを誇る今元勇輝が相手だ。ポストを絡めた2対2ならば、ライン際の動きを知っているキャプ

「早く帰りたいのに」って思っているでしょうけど」と笑いながらも、練習相手を捕まえては勝負を挑む。

練習相手は誰でもいいというわけではない。1対1は、チームで一番強い相手と勝負する。中部大で練習する時は、チーム一のフィジカルを誇る今元勇輝が相手だ。ポストを絡めた2対2ならば、ライン際の動きを知っているキャプ

「意外とテクニシャンですね」と声をかけると、榎田は屈託のない笑みを浮かべた。「丸2年間実戦から離れていますけど、その分、1対1や2対2は死ぬほどやりましたからね。自分の中では、以前より攻撃がうまくなった手応えがあるんですよ。」

たまたま「人数が少ないから」と言っていて、早めに練習を終えるチームがあるけど、もつたいないですよ。人数が少なければ、その分、1対1や2対2をたくさんやれるの

左ヒザはまだ万全とは言えない。100%の状態には戻らないかも知れない。それでも総合力では、自分が伸びているという実感がある。「プランクがあるから」「もう30才を過ぎたから」といった固定観念は、榎田には通用しない。大学から本格的にハンドボールを始めた榎田にとって、忘れられない言葉がある。中部大の4年生の時、当時監督だった蒲生晴明(現部長)に「榎田は30才を過ぎたら、いい選手になる」と言われた。「その言葉がずっと僕の中にあるんですよ。だからHondaでの下積みにも耐えられたし、自分もつといい選